

2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書			2025/9/23	
団体名	NPO法人だっぴ	活動タイトル	高校生の放課後越境事業	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景	
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	当団体の実現したいビジョンは「一人一人の若者が人とのつながりの中で自分らしく生きられる社会」である。 具体的には、中学生～大学生世代の若者がありたい自分の未来やつくりたい社会の未来など、意志ある未来のビジョンを描き、それを実現することができる社会である。 若者たちが意志ある未来を描く意欲を醸成し、行動するなかで創造性や協働性を育むことのできる教育環境をつくる。		フリースペースでベンチを製作する高校生	
●団体の社会的役割(ミッション)	当団体の社会的役割（ミッション）は、「若者の可能性と実現力を開拓する」である。具体的には、以下のような取組を推進する。 1）中学生・高校生がありたい自分の未来やつくりたい社会の未来など、意志ある未来を描けるよう、多様な人や社会とつながり、意欲を高める場をつくる。 2）中学生～大学生世代の若者が自分のつくりたい社会やなりたい自分に向けて行動し、若者の成長や社会の変化を生み出す活動を行う。			
●団体の活動基盤	●望ましい人的資源：学校の授業開発や学校外の画期的な活動プログラムの開発および運営のマネジメントを担える常勤スタッフが複数名在籍し、広報・ファンドレイジングを担える常勤スタッフが1名以上いる。 ●望ましい物的資源：事業で活用するスペース（子ども・若者の活動拠点）や物品等について、協賛企業や個人の寄付等でかなりの部分まかなえるようなネットワークが構築されている。 ●望ましい活動資金：自主事業・受託事業・寄付/会費のバランスがとれたリスク分散の収益構造がつづけている。また、必要なときに自己資金を投資できるだけの余力のある財務基盤をもっている。 ●望ましい情報：スタッフのスキル向上を図るため、団体の事業運営・人材育成マニュアルが順次、スタッフ自らにより充実されるというサイクルが回る。また、スタッフがさらなる成長を目指す創発の場として、同業者同士の集合研修など、研鑽のネットワークが構築されている。同時に、そのネットワークで当団体のノウハウをオープンソース化して、事業の実行者を増やす。			
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)		オンラインで高校生とメンタリングする空間設計
●放課後キャリア探究 実施回数：36回 参加者数：791名（累計） 高校内に開放されるフリースペース。運営スタッフの大学生や大人によって運営されている。県内4校で実施し、うち2校については高校生の活動拠点あるいは学校生活においては問題を抱えがちな生徒がケア（心の回復）される場所として機能し、校内（教員・生徒）の認知もとれてきている。 ●オンライン探究部/越境活動 実施回数：15回 参加者数：25名（累計） オンラインでは高校1校の探究学習と連携するが、授業中と放課後にオンラインのメンタリング空間を担保。現実空間では主に放課後キャリア探究を実施する高校で生徒のアクションをサポートし、学校外での活動を促進する。 ●運営スタッフマニュアル ユースワークに加えて、ファシリテーション/探究学習/ワークショップデザインなどの分野に関するナレッジをnotionサイトとして限定公開。		●放課後キャリア探究 利用者の自尊感情についてアンケートを実施し、得点2.5以上が80%、3.0以上が45%となった。放課後キャリア探究未実施校（かつ実施校と類似クラスター）の回答結果は得点2.5以上が83%、3.0以上が15%であったので、自尊感情が高まっていると考察できる。また、強くそう思う（4点）回答者の推移（期初と期末にアンケートを実施）について項目をピックアップすると、「私は自分自身にいたい満足している」は31%→41%、「自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている」は24%→47%となった。 ●オンライン探究部/越境活動 利用者の自己効力感についてアンケートを実施し、得点7点以上が62%となった。こちら未実施校の回答結果は7点以上が42%だったので、自己効力感が高まっていると考察できる。また、個別項目では「どんなことでも積極的にこなすほうである」70%→84%という意識変容があった。 ●総評 放課後キャリア探究は各高校の生徒観や雰囲気によって期待される機能が異なることが分かり、4校中2校は高校校での定着が見えてきている。一方で、学校外への越境活動については参加者の確保に課題が残っている。どのような間口の設定が参加者募集に有効なのか、引き続き検討していきたい。また、こうした活動を拡大していくにあたっては運用者の熟練が必須であり、熟練を助けるツールとしてマニュアルを作成できた。		
■ 事業を通じて得られたノウハウ		■ 望ましい社会状況を達成するための課題		
●ケアと越境 当然ながら、高校生によって「今」必要なことは異なる。それを「自分を受け入れてほしい」と「成長したい」という2つのインサイトに分けて見立て、前者にはケアを後者には越境をつなげる。その見立てる力と見立てに応じたスタッフの応答のノウハウを蓄積することができた。ケアは足踏み的で、前進を求める学校生活に対して休息として補完する。越境において、多様校クラスターでは、速くのぼやんとした目標地点はあったとしても1歩目のToDoを自力で生成できないことがままある。その一歩目をスタッフと一緒に考え、背中を後押しすることで越境が始まっていく。 ●ハレとケ 居場所的空間に期待されることは（つながりという観点から）日常性だと考えていたが、祝祭も必要かもしれないと考え始めた。とりわけ僻地にある学校では、高校生が自力で移動できないため、学校と自宅の往復を繰り返す日常は風のような作業の繰り返しにも近い。人間の原初的な欲求にリーチし、高校生たちの衝動を喚起するという意図において、年1回が2回くらいの祝祭的空間が学校の中につくる意義や方法を整理することができた。		●普通科教育と社会教育的なものとの融和 今回、実施対象となった高校4校はどれも普通科（あるいは総合学科）だが、在籍する多くの生徒はいわゆる座学で完結できるような既存の普通科教育への苦手意識を持っている。すなわち、普通科に居ながら普通科教育とアンマッチを起こしている。彼らは座学の反対にある、実存的でフォアキャスト的な（非連続で進んでいく）学びとマッチいえると考え。その性質は遊びとも近く、社会教育的・ノンフォーマルな活動である。学校教育、とりわけ普通科教育にあるアンマッチ性を社会教育が補完できる環境をつくることで、あらゆる子どもたちの成長を促進する。 ●運用者の熟達 非連続で進んでいくフォアキャストな学びにおいては、子どもの傍にいる運用者の力量が大きな変数となっている。運用者は子どもの伴走者としての役割を期待されており、どのように伴走するといひかは経験から練り上げられる暗黙知になっていた。今回、そうしたナレッジを形式知にしていく（試みとして、パターンランゲージや動画によるマニュアルを制作した。一方で、岡山県各地の運用者が整理された形式知をどのように習得していくと良いかについては課題が残っている。		
		■ 受益者の具体的な変化（自由記入）		
		学校の外に飛び出したことで視界が開けた高校生がいたり、月1回でもフリースペースが自分の居場所となり、学校に通える活力を得ていると言う高校生がいたり、教室では先生が心配するくらいおとなしい存在だった高校生が、たどたどしく大人とはコミュニケーションできている光景があったりします。		